

【 生神女誕生祭のトロパリ 第4調 】

しょうしんど う て い ぢよ お よ 、 なんぢ の う ま れ  
 生 神 童 貞 女 お よ 、 なんぢ の う ま れ 誕 生

は ぜん せ か い に よ ろ こ び を し ら せ た り 、 け 蓋  
 全 世 界 歡 喜 知

だ し なんぢ よ り ぎ の ひ た る ハ リ ス ト ス わ が か み は か が  
 爾 義 日 我 神 輝

や け え り 。 か れ は の ろ い を と き て し ゆ く  
 彼 詛 解 祝

ふ く を あ た え 、 し を ほ ろ ぼ し て わ れ ら に  
 福 與 死 滅 我 等

え い え ん の い の ち を た ま え り 。  
 永 遠 生 命 賜

【 生神女誕生祭のコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き い す 、  
 光 榮 父 子 聖 神 歸 います、

い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
 今 何 時 世 世

し じ ょ う な る も の お よ 、 なんぢ の せ い な る  
 至 淨 者 お よ 、 なんぢ の 聖

う ま れ に よ り て 、 イ オ ア キ ム お よ び ア ン ナ は こ 子  
 誕 生 因 及

な き は ぢ 、 ア ダ ム お よ び エ ヴ ア は し の き ゅ う か  
 辱 及 死 朽 壊

い を ま ぬ か れ た り 。 て い ざ い よ り と か れ  
免 定 罪 釋

し な ん ぢ の た み も こ れ を ま つ り て 、 な ん ぢ  
爾 民 之 祭 爾

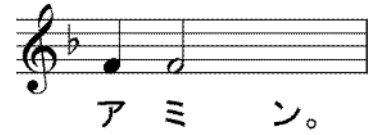
に よ ぶ 、 た い の あ れ た る も の お は  
呼 胎 荒 者

し ょ う し ん ぢ よ 、 わ れ ら の い の ち の よ う い く し ゃ  
生 神 女 我 等 生 命 養 育 者

を う む 。  
生

司祭) ( 黙誦： <sup>せい かみ せいじゃ うち いこ</sup> 聖なる神、聖者の中に息い、<sup>せいさん こえ もつ かしょう</sup> セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
<sup>さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう</sup> ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と  
<sup>ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ</sup> なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
<sup>ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい</sup> 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行 う者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
<sup>た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい</sup> を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
<sup>さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの</sup> る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と  
<sup>しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ</sup> なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
<sup>もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ</sup> 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
<sup>せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい しょう</sup> を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生  
<sup>しんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ</sup> 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) <sup>けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢち こ せいしん けん いま いつ よよ</sup> 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
 に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る  
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め  
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い  
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ  
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、  
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん  
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う  
聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを  
 殺 聖 常 生 者 我 等 を  
 あわれめよ。  
 憐

司祭) ( 黙誦：<sup>しゅ な よ き もの あが ほ</sup>主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、<sup>ぎ もの なんぢ そのくに</sup>ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
<sup>こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ</sup>の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、 )

【 <sup>プロキメン</sup> 提綱 第3調 生神女の歌 】

司祭) <sup>つつし き しゅうじん へいあん</sup>慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup>爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) <sup>わ たましい しゅ あが わ しん かみわ きゅうしゅ よろこ</sup>プロキメン、我が靈は主を崇め、我が神は神我が救主を悦べり。

わがたましいはしゅをあげめ、わがしんは  
 我 靈 主 崇 我 神  
 かみわがきゅうしゅをよろこべり。  
 神 我 救 主 悦

誦經) <sup>けだしそのひ いや かえり いま のちばんせいわれ さいわい い</sup>蓋其婢の卑しきを顧みたり、今より後萬世我を福なりと謂わん、

わがたましいはしゅをあげめ、わがしんは  
 我 靈 主 崇 我 神  
 かみわがきゅうしゅをよろこべり。  
 神 我 救 主 悦

誦經) <sup>わ たましい しゅ あが</sup>我が靈は主を崇め、

わがしんはかみわがきゅうしゅをよろこべり。  
 我 神 神 我 救 主 悦

【 アポστόロス 使徒經 240 端 フィリッピ書 2 章 5 節～11 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パヴェルがフィリッピ人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、爾等はハリストス イススの意を以て意とすべし。彼は神の像にして、

神と匹しくなることを 憚うとせざりき、然れども己を虚しくして、僕の貌を受け、人

と同じき者と爲りて、外形に於て人の如くなり、己を卑くして、死に至るまで 順い、

且十字架の死に至れり。故に神も彼を無上に高くして、彼に凡の名に超ゆる名を賜

えり、凡そ天に在り、地に在り、及び地の下に在る者の膝は、イススの名の前に 屈み、且

凡の舌はイスス ハリストスが主たるを承け認めて、光榮を神父に歸せん爲なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) キリスト・イエスにあっただいしているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、また、あらゆる舌が、「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。

\*\*\*\*\*

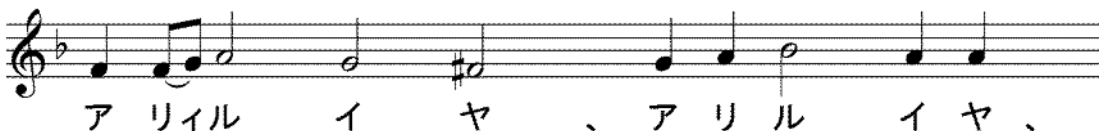
【 アリルイヤ 第8調 】

司祭) 爾に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

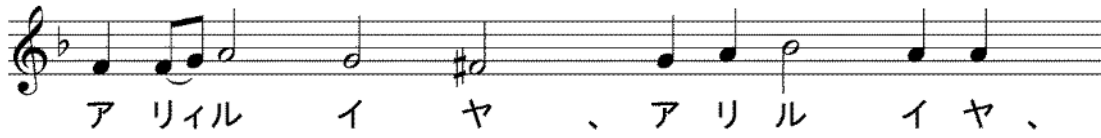
誦經) アリルイヤ、



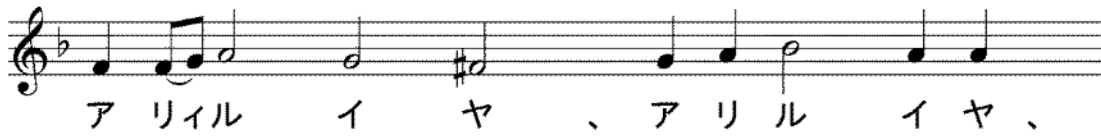




誦經) 女よ、之を聴き、之を觀、爾の耳を傾けよ、



誦經) 民中の富める者は爾の顔を拜まん、



司祭) ( 黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

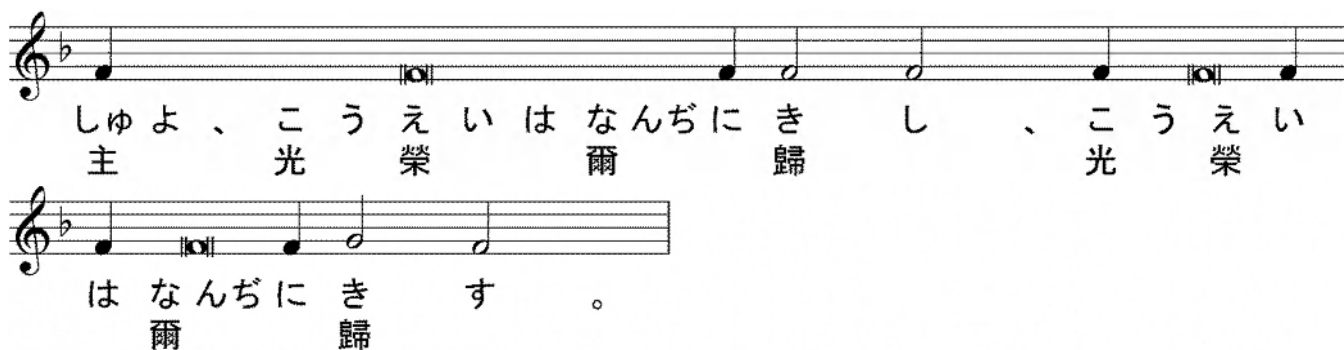
て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世々に、アミン。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書 54 端 10 章 38~42 節、11 章 27~28 節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



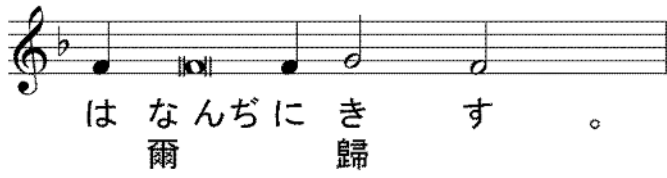
司祭) <sup>つつし</sup>謹<sup>き</sup>みて聴くべし、<sup>か</sup>彼の<sup>とき</sup>時、<sup>かれら</sup>彼等<sup>ゆ</sup>が行ける<sup>とき</sup>時、<sup>ひとつ</sup>イスス<sup>むら</sup>ーの<sup>い</sup>村<sup>あるおんな</sup>に入りしに、或<sup>あるおんな</sup>婦<sup>マル</sup>マル  
<sup>な</sup>ファ<sup>もの</sup>と名づくる<sup>かれ</sup>者、<sup>そのいえ</sup>彼を<sup>むか</sup>其<sup>そのしまい</sup>家に<sup>な</sup>迎<sup>もの</sup>えたり。其<sup>そく</sup>姉妹<sup>な</sup>にマリヤと名づくる<sup>もの</sup>者あり、イススの<sup>そく</sup>足  
<sup>か</sup>下<sup>ぎ</sup>に坐して、<sup>そのことば</sup>其<sup>き</sup>言<sup>き</sup>を聴<sup>き</sup>けり。マルファは<sup>きようじ</sup>供事<sup>おお</sup>の多<sup>よ</sup>きに<sup>こころ</sup>困<sup>わづら</sup>りて<sup>つ</sup>心<sup>い</sup>を煩<sup>い</sup>わし、就<sup>い</sup>きて<sup>い</sup>曰<sup>い</sup>え  
<sup>しゅ</sup>り、主<sup>わ</sup>よ、我<sup>しまい</sup>が<sup>われひとり</sup>姉妹、<sup>のこ</sup>我<sup>きようじ</sup>一人<sup>なんぢい</sup>を遺<sup>な</sup>して<sup>な</sup>供事<sup>これ</sup>せしむる<sup>めい</sup>を<sup>い</sup>爾<sup>い</sup>意<sup>い</sup>と爲<sup>い</sup>さざる<sup>い</sup>か、之<sup>い</sup>に命<sup>い</sup>じて、  
<sup>われ</sup>我<sup>たす</sup>を助<sup>か</sup>けしめ<sup>か</sup>よ。イスス<sup>か</sup>彼<sup>こた</sup>に答<sup>い</sup>えて曰<sup>い</sup>えり、マルファ<sup>なんぢ</sup>よ、マルファ<sup>おお</sup>よ、爾<sup>こと</sup>は多<sup>こと</sup>くの事<sup>こと</sup>を  
<sup>おもんば</sup>慮<sup>か</sup>りて<sup>こころ</sup>心<sup>ろう</sup>を勞<sup>しか</sup>せり、然<sup>も</sup>れども<sup>と</sup>需<sup>ところ</sup>むる<sup>ひとつ</sup>所<sup>ひとつ</sup>は<sup>ひとつ</sup>一<sup>よ</sup>のみ。マリヤ<sup>ぶん</sup>は善<sup>えら</sup>き分<sup>えら</sup>を擇<sup>これ</sup>びたり、是  
<sup>かれ</sup>は彼<sup>うば</sup>より奪<sup>べ</sup>う可<sup>これ</sup>からず。此<sup>い</sup>を言<sup>とき</sup>う時、<sup>ひとり</sup>一<sup>おん</sup>の<sup>な</sup>婦<sup>み</sup>民<sup>うち</sup>の中<sup>こえ</sup>より<sup>あ</sup>聲<sup>あ</sup>を揚<sup>か</sup>げて、<sup>い</sup>彼<sup>い</sup>に謂<sup>なんぢ</sup>えり、爾  
<sup>はら</sup>を孕<sup>はら</sup>みし腹<sup>なんぢ</sup>と<sup>す</sup>爾<sup>ち</sup>が嘯<sup>さい</sup>いし乳<sup>い</sup>とは<sup>い</sup>福<sup>しか</sup>なり。彼<sup>か</sup>は曰<sup>か</sup>えり、然<sup>ことば</sup>り、神<sup>き</sup>の言<sup>き</sup>を聴<sup>これ</sup>きて<sup>まも</sup>之<sup>まも</sup>を守  
<sup>もの</sup>る<sup>さい</sup>者は<sup>い</sup>福<sup>い</sup>なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスがある村へはいられた。するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れた。この女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、御言に聞き入っていた。ところが、マルタは接待のことで忙がしくて心をとらみだし、イエスのところにきて言った、「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください」。主は答えて言われた、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである」。イエスがこう話しておられるとき、群衆の中からひとりの女が声を張りあげて言った、「あなたを宿した胎、あなたが吸われた乳房は、なんとめぐまれていることでしょう」。しかしイエスは言われた、「いや、めぐまれているのは、むしろ、神の言を聞いてそれを守る人たちである」。

\*\*\*\*\*





※聖体礼儀③（金ロイオン聖体礼儀）へ